



TITLE:

# 大東亞戦争の本質

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

---

CITATION:

谷口, 吉彦. 大東亞戦争の本質. 東亞經濟論叢 1942, 2(4): 765-778

ISSUE DATE:

1942-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128727>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學部  
東亞經濟研究所

年四回（二月、五月、八月、十一月）發行

# 東亞經濟叢論

第貳卷 第四號

昭和十七年十二月

## 附錄 南方文獻目錄

大東亞戰爭の本質……………	經濟學博士 谷口吉彦
支那私鑄考……………	經濟學士 穗積文雄
北支緊急物價對策の一斷面……………	經濟學士 德永清行
舊英領馬來に於ける印度人勞働者……………	經濟學士 福田省三
フランス領有前後の安南社會……………	經濟學士 鍵本 博
支那に於ける工業化の基本問題……………	經濟學士 名和統一
支那の石炭鑛業經營について……………	經濟學士 菊田太郎
支那製絲業の生産形態……………	經濟學士 堀江英一
華僑と買辦……………	經濟學士 鈴木総一郎
再組織下にある最近の佛印經濟……………	經濟學博士 松岡孝兒

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發賣

# 大東亞戰爭の本質

谷 口 吉 彦

目次	一	世界戦争の本質
三	理想戦としての大東亞戦争	
四	二	大東亞戦争の本質
	四	經濟戦としての大東亞戦争

## 一 世界戦争の本質

大東亞戦争は言ふまでもなくたゞそれ自身において獨立に引離されたる一つの戦争ではなく、地理的・空間的には、世界戦争の一翼として、それとの必然の關聯において戦はれつゝあると共に、歴史的・時間的には、滿洲事變および支那事變の必然の連續として、すでに十年以上にわたつて斷續せる長期戦の一つとして戦はれつゝある。それ故に大東亞戦争の本質を把握するには、一方では之を世界戦争の一つとして把握すると共に、他方では之を連續せる東亞戦争の一つとして考へねばならぬ。

こゝでは世界戦争の本質について一般的に詳論する餘裕は無いが、これが單純なる國際戦争または植民地戦争と本質的に區別されねばならぬこと、ならびにその本質的區別は主として世界秩序との關聯にあることだけは、

こゝに指摘しておかねばならぬ。蓋し大東亞戰爭は長期戦であると言はれながらも、今日までまだ實質的には世界戰爭の經驗をもたず、國際戰爭の經驗のみを有する吾が國民にとつては、その長期戦の意味はなほ十分に理解されず、況んや理論的な根據から之を明確に理解するものは殆んどないと思はれるからである。わが國民の經驗せる日清戰爭または日露戰爭の如き國際戰爭と、今日の如き世界戰爭とは、その形態を異にし、その原因を異にし、従つてその期間を異にして、國際戰爭は一、二年の短期戦をもつて終結する傾向つよきに反し、世界戰爭は長期戦に終結する傾向がつよい。すでに吾々が滿洲事變以來、斷續して十年以上も戦ひつゞけつゝあるのは、即ちこれが全體として一つの世界戰爭を成してゐる何よりの證左であると言はねばならぬ。

單純なる國際戰爭は、たゞ二國間の經濟的利害の衝突に出發する場合の多きに反し、世界戰爭は世界秩序ことに世界經濟秩序の行き詰りによる世界秩序の轉換期に於て、それとの必然の關聯において勃發するものである。この點に世界戰爭の本質的性格が潜んでゐると考へねばならぬ、従つて今次の世界戰爭は、これまで世界を支配しつゝあつた英米世界秩序の行き詰れる必然の結果として、この世界舊秩序を打破して、新秩序を建設するための戰爭として戦はれつゝあるわけである。

然らば世界秩序の行き詰りは、何故に謂はゆる自然崩壊の過程を採らずして、かくの如き世界戰爭を必然ならしめるか、また人類の叡智をもつてして、何故に理知的なる平和過程において、世界秩序の轉換を實現し得ないのか、われ／＼は不幸にして世界戰爭の不可避的な運命を認めざるを得ない。蓋し舊き世界秩序の成立し發展する過程において、經濟的に最も有利なる立場にあつて、この秩序の存続によつて世界經濟の支配的地位を維持

しつゝあつた諸國にとつては、たとひ行き詰れる世界秩序といへども、之を存続せしむるにあらずんば、その諸國の存続發展を期することは出来ないから、世界戦争を賭してもその舊秩序の維持を圖らねばならぬ立場にある。また是等の諸國にとつては、その舊秩序の行き詰りさへ、實は認識し得ざる場合が多いからである。之に反してその舊き世界秩序の下において、最も不利益なる立場にあつて、この秩序の續く限りは、自國の經濟的發展は期し得られない諸國にとつては、世界戦争を賭しても、この舊秩序の打破と新秩序の建設に向はねばならぬ。而かもその世界秩序の成立し發展せる段階にあつては、かくの如き意圖も實現の可能性は少いが、一たびその行き詰りを暴露する段階に達する場合は、これに乗じてその秩序の轉換を期せんとする努力が進められる。かくして世界秩序の現狀を維持せんとする諸國と、この現狀を打破して新秩序を建設せんとする諸國と、世界の諸國はこの何れかの陣營に参加して、こゝに謂はゆる世界戦争が展開される。かの中世期と近世期との轉換期において戦はれたナポレオン戦争もこれであり、近世的なる英米世界秩序の行き詰りによつて勃發した第一次世界戦争もこれであり、今日の第二次世界戦争もまたこれに外ならぬ。

それ故に今次の世界戦争にして、かりに英米舊秩序の徹底的打破に至らずして、中途半端に之を終結するが如き場合には、依然として英米舊秩序は恐らく残存するであらう。けれどもこの秩序はすでに世界平和を維持し得ざるまでに行き詰れるものであるから、それならばまた遠からざる將來において、さらに第三次・第四次の世界戦争を不可避とするであらう。反對に幸にして英米舊秩序の徹底的破砕に終結したとすれば、こゝに世界秩序の轉換を實現しえて、世界新秩序の建設を完成することが出来るわけである。かくして世界秩序の轉換は、決して

唯物的なる自然崩壊にもあらず、また機械的なる必然運命でもなく、實に國民の生死と國家の興亡を賭する世界戦争を通じて、始めて可能となるものである。

かくの如き意味において世界戦争は國際戦争と本質的に區別さるべきものであり、同時にまた植民地戦争ともその本質を異にしてゐる。かの英國資本主義の發展期において、世界の到る所に挑戦したる植民地獲得戦争ならびに之とは反對の意識を有する植民地解放戦争もまた、世界秩序と密接なる關聯を有するものではあるが、併しその關係は世界戦争の場合とは全く異つてゐる。何れにせよ、世界戦争はこの二つの意味の植民地戦争とはその本質を異にするものではあるが、併し現實の世界戦争は、同時にまたその中に國際戦争をも包含し、植民地戦争をも包含してゐる場合が多い。例へば今次の世界戦争は、本質的には一つの世界戦争でありながらも、その中に國際戦争をも含み、また植民地解放戦争をも含んでゐるが如き是である。こゝに大東亞戦争の特殊の意義が含まれてゐる。

## 二 大東亞戦争の本質

大東亞戦争は世界戦争の一つであるといふ點から、世界舊秩序の一つとしての東亞舊秩序の打破と東亞新秩序の建設を意味すること言ふまでもない。ところで謂ふ所の東亞舊秩序とは何か、英米支配の世界舊秩序は、言はゞ歐米舊秩序と東亞舊秩序より成り、而かもこの二つの舊秩序は、互に離るべからざる關聯にありながらも、また全く異なる原理にたつた二つの秩序であつた。即ち歐米舊秩序は謂はゆる英米的なる近世的秩序であり、自由

主義・個人主義・平等主義の原理にたつものではあつたが、之に反して東亞舊秩序は、歐米諸國の東亞支配の秩序として、却つて中世的なる壓制主義・差別主義・獨裁主義の原理にたち、政治的には植民地として之を支配し經濟的には資本輸出によつて之を搾取じ、これによつて歐米の世界支配を成立せしめつゝ來たものである。

それ故に大東亞戰爭による東亞新秩序の建設は、二重の意味において新秩序の本質を具備せねばならぬ。一は英米的なる近世的舊秩序に對する新秩序であり、一は東亞支配の中世的舊秩序に對する新秩序である。

大東亞戰爭は何よりもまづ東亞支配の歐米舊秩序を打破して、歐米からの東亞解放を實現せねばならぬ。この意味において之は東亞解放戰であり、理想實現戰である。即ち世界戰爭でありながらも一つの植民地解放戰である。これ即ち聖戰と言はるゝ所以であつて、吾國は之によつて東亞を領有するにあらず、利權を獲得するにあらず、一に東亞諸民族を歐米植民地から解放せんとする神聖なる理想實現のための戰爭である。吾國が滿洲事變以來、斷續十年以上の東亞戰爭を戦ひつゞけつゝあるのも、全くこの理想實現のために外ならぬ。

併しながら歐米から解放されたる新東亞をして、自由主義・平等主義の上に英米的なる近世秩序を建設せしむるものならば、それはなるほど從來の東亞舊秩序を打破するものではあるが、併し英米的なる舊秩序はそこに再現せられてゐるから、之をもつて東亞新秩序の建設とは言ひ難い。大東亞戰爭のもつ意義は、さらにかゝる英米秩序をも超克して、こゝに全く新たな東亞新秩序を建設し、これを以つて來るべき世界新秩序建設の基盤となし準備となさんとするものである。併しそのための前提となり準備となるものは、何よりもまづ歐米からの東亞解放でなければならぬ。

滿洲事變においては王道樂土といひ、支那事變においては安居樂業といひ、大東亞戰爭においては東亞共榮といひ、その表現方法はそれ／＼異なつてはゐても、前後を一貫する理想は一であり、王道樂土も安居樂業も東亞共榮も、東亞における歐米資本の搾取をそのまゝにしては、決して實現さるべきものではない。即ち東亞解放の聖戰としての大東亞戰爭に勝ちぬくことなくしては不可能である。こゝに理想戰としての大東亞戰爭の本質がある。

併しながら他方にまた、世界戰爭は之を經濟的に考察すれば、一見これと矛盾するが如き本質をもつてゐる。世界秩序の發展する必然の結果として、世界のすべての國は、平和國家から國防國家に向つて轉換するものであるが、何れの國といへども單獨國家として國防國家を完成することは、國防資源の關係から、到底不可能に近い。蓋しこの段階において國防國家を完成するための生産力を擴充するには、資本よりも勞働よりも何よりもまづ物資を必要とし、物資の根源としての資源を確保することは、何よりも重要な要請となつて現はれるからである。往時の如き自由貿易の行はれた時代においては、自國に不足する物資は、世界の到る所に之を求めることが出来たけれども、國防國家の段階では之は次第に困難となる。そこで次の段階では出來うる限り之を自國の單獨國家において確保せんとするけれども、これまた殆んど不可能に近い。ことに世界舊秩序の支配的地位にあつて世界の資源を到る所に支配しつゝあつた諸國は別として、この舊秩序を打破して世界新秩序を建設せんとする現状打破國において、この困難は殊更に大でなければならぬ。

それ故に多數國家の廣き區域において、その國防資源を綜合的に確保せんとする謂はゆる廣域經濟への要請を



必然とするに至る。これ即ち今次の世界戦争を勃發せしむるに至つた直接の經濟的原因をなすものである。

大東亞戦争もまた世界戦争である以上、かくの如き經濟的根據すなはち廣域經濟による國防資源の確保を目的とすることは言ふまでもない。即ち東亞廣域經濟の建設これである。この意味においては、大東亞戦争による東亞新秩序の建設とは、即ち東亞廣域經濟の建設によつて、こゝに國防資源を確保せんとするものに外ならぬ。

そこで問題は、かくの如き大東亞戦争の經濟的根據と、さきに述べたる東亞解放の理想的目標とは、果して矛盾なく兩立しうるものかどうかにある。さきには大東亞戦争は神聖なる理想實現のための戦であり、之によつて吾國は何ものも獲る所もなき聖戦であると言ひながら、後には之によつて國防國家を完成せんための資源を東亞廣域經濟として確保するにあると言ふは、その間に兩立しがたき矛盾を含むものではないか。

われ／＼の見解では、大東亞戦争の理想的目標と經濟的目標とは、決して矛盾するものではない。なるほど吾國が、ひとり吾國のみの國防確保のために、大陸または南方の國防資源を獲得するものならば、その理想的標榜との間に或は矛盾を免がれないかも知れない。併しながら理論的にも現實的にも、謂ふ所の國防國家は、決して吾國のみの國防を意味するものではなく、廣く大東亞全體を含む國防國家であり、大東亞諸國の國家防衛である。吾國が南方國防資源の石油を開發するのは、之によつて吾國のみならず、南方諸地域を含む東亞全體を防衛するための石油である。

而して東亞全體を防衛し、こゝに國防國家を完成することは、大東亞戦争の理想的目標を達成するための缺くべからざる前提條件である。それは第一には、消極的なる意味において、歐米の東亞支配を驅逐して、東亞を歐

米から解放するためには、今日の大東亞戰爭を最後の完勝にまで導かねばならず、戦後においても執拗に繰り返さるべき彼等の奪還運動に抗戦するために、絶対に必要なる前提であるのみならず、第二に、積極的な意味において、その解放されたる東亞の地域に新秩序を建設して、東亞共榮の理想を實現するためにも、絶対に缺くべからざる條件である。東亞防衛を完成せしめては、東亞解放も東亞共榮も、初めから問題となり得ないからである。そして大陸ならびに南方の國防資源の確保は、その東亞全體の防衛のために、また絶対に缺くべからざる條件である。

### 三 理想戦としての大東亞戦争

そこで理想戦としての大東亞戦争が、その最高の目的を完遂せんためには、如何なる諸條件を必要とするか、世界新秩序の一つとしての東亞新秩序を建設して、東亞共榮の理想を實現せんためには、何よりもまづ吾國自身の新秩序を建設せねばならぬ。吾國自らが依然として、英米の舊秩序を國內に残藏しながら、東亞または世界の新秩序を建設せんとするが如きは、到底不可能なることは言ふまでもない。もとく世界秩序なるものは、何れかの國にその祖國を有し、最初にまづその祖國の國家秩序として成立し、その歴史的発展を遂げつゝある間に、次第に世界各國に擴充して、遂に世界秩序として成立するに至るものであることは、今日までの世界舊秩序が英國を祖國として、遂に近世の世界秩序にまで發展したる事實を見ても明らかである。

ことに新秩序の指導者原理においては、少くとも東亞の指導國をもつて任ずる吾國としては、他の東亞諸國に

對して、率先躬行垂範によつて之を指導せねばならぬ立場にあるものであるから、吾國まづ自らが眞つ先に新秩序の國內體制を整備せねばならぬことは言ふまでもない。吾國のかくの如き實踐的指導によつてこそ、初めて他の東亞諸國も之に協力して、全體として東亞新秩序を完成しうるからである。

然るに國內體制の新秩序運動は、かの一昨年夏の新體制運動以來、徐々に進展しつゝありとは言へ、まだ十分の効果を收めてゐるとは言ひ難い。新體制運動が實效を收め得たのは、翼賛政治の出發と經濟統制會の成立と隣保組織の整備と、三つの方向にあり、何れも相當の効果を收めつゝあるが、尙ほ十分とは言へない。ことに國民個人の根本的精神において、英米濫滅の戰爭中にありながら、なほ英米的なる個人主義・自由主義・平等主義の殘滓の抜け切らないものがある様では、國內新秩序の確立は期し得られない。英米濫滅の戰爭で勝ちぬけためには、まづわが國民自身の内部に潜在する英米思想を濫滅せねばならぬと言はれるのは、即ち是である。

今日なほ一部の人々の中には、統制經濟の前途について明確なる見透しを有しないものも少くない。例へば統制經濟は戰時の一時的現象にすぎず、戰後においては再び往時の如き營利主義の自由經濟が復活するであらうと考へるものも少くないが、かくの如き考へ方そのものが即ち英米思想であり、敗戰思想である。何となれば戰後において再び英米的なる營利主義の自由經濟が復活すると考へることは、英米の勝利を意味するからである。なほ今度の世界戰爭が萬一にも英米の勝利に歸したとすれば、英米的なる世界舊秩序はそのまゝに存續することとなり、營利主義の自由經濟は戰後もそのまゝに存續するであらう。併しながらこの戰爭がわれ／＼の確信するが如く、樞軸側の完勝に終結したとすれば、世界舊秩序は打破されて、之によつて新秩序の成立を見なければ

ならぬ筈であるから、そこにはもはや英米的なる營利主義の自由經濟は、決してそのまゝに残存しうる筈はない。かくの如きはその人の意識するとせざるに拘らず、一つの敗戦思想を意味するといふのはこの故である。

國內新秩序の確立による國內體制の強化は、政治秩序においても經濟秩序においても文化秩序においても、等しく要請されつゝある。政治においては英米的なる民主政治を打破して、新秩序の翼賛政治を建設せんとし、經濟においては營利經濟を超越して奉仕經濟を建設せんとし、文化においてもまた資本主義文化の克服の上に、日本的または東亞的な新文化を創成せんとする氣運にある。

かくの如き國內新秩序の建設は、むしろ戰時國內體制の強化と矛盾するものではなく、また矛盾せしめてはならぬ。過去の或る段階において主張されたる如く、若しもこの二つが矛盾するものならば、今日はむしろ國內體制の強化のために、新秩序の建設を犠牲に供しなければならぬ。この戰爭に勝ちぬくためには、何を措いても戰時體制を強化せねばならぬからである。併しながらわれ々の見る所では、この二つは決して矛盾するものではなく、むしろ相互依存の關係にあると思はれる。即ち國內新秩序の建設は直ちに國內體制を強化するものであり、また國內戰時體制を強化するためには、新秩序を國內に建設せねばならぬ。英米的なる舊秩序をそのまゝに國內に残存せしめてゐては、英米撃滅の戰時體制が強化される筈はないからである。併しまた國內新秩序の建設は、決して觀念的にそのこと自身のために要請されるのではなく、今日では戰爭遂行のための絶對的條件として要請されるものである。この戰爭を勝ちぬくためには國內體制の強化を絶對に必要とし、そのためには國內新秩序の確立を絶對の條件とするから、戰爭遂行の過程において、人の好むと好まざるに拘らず、新秩序の建設は必然に

進まねばならぬ。現に支那事變ことに大東亞戦争の段階に入ると共に、政治・經濟・文化の各方面において、新秩序の建設は國內體制の強化策として着々と進捗しつつある。

この點において、われ／＼の立場は英米の立場と全く異なつてゐる。彼等は最近に至つて漸くこの戦争の目的を自覺したるものゝ如く、これは自由主義・民主主義を擁護するための戦争であると唱へつつあるが、このことは即ち英米支配の世界舊秩序を維持するための戦争であることを自ら告白せるものとして興味あることではあるが、併しそれよりも重要なことは、彼等が自由主義・民主主義の爲の戦争を遂行するに當つて、その自由主義・民主主義によつては、この戦争は遂行されないといふ矛盾にある。即ち世界舊秩序を擁護するための戦争が、舊秩序の原理によつては遂行されず、却つて反對に、新秩序の原理によつて遂行されつつあるといふ矛盾これである。之に反してわれ／＼の側にあつては、その間に何等の矛盾もなく、新秩序建設のための戦争を、新秩序の原理によつて遂行することが出来る。こゝにこの戦争の必然なる運命が暗示されてゐると言へる。

#### 四 經濟戰としての大東亞戦争

大東亞戦争はかくの如く世界新秩序としての東亞新秩序を建設せんとする理想實現のための戦争であり、この理想戰を遂行するためには、戰時國內體制を強化するための新秩序を國內に確立せしめねばならず、また現實に確立せしめつつあることは、以上のぶるが如くである。然るに他方では、大東亞戦争はまた世界戦争の一つとして、國防資源を確保せんとする經濟戰または資源戰であり、而かもこの意味の經濟戰は、さきの理想戰とは何ら

の矛盾もなく、却つてそのために必要不可欠の前提條件をなすこともまた、すでに明らかにされたる所である。

たゞこゝに残されたる問題は、その謂ふところの經濟戰を遂行するために必要な諸條件は何かにある。さきに國內體制を強化するための新秩序の確立につき述べたと同じ意味において、經濟戰または資源戰としても、國內經濟體制の強化による國內經濟力または資源力の確保を絶對的條件とすることは言ふまでもない。併しなからこの問題は、今日までに十分に認識せられ論議せられ、かつ實踐されつゝあるから、こゝには新たな問題として採りあげる必要はない。たゞ今後の問題は、いかにして現實にその最高總力を發揮せしめうるかにある。

こゝに新たな問題として提起せんとするのは、この資源戰としての大東亞戰爭を完遂し、かつ將來の國防國家を完成する上より見て、謂はゆる大東亞共榮圈の有する意義如何にある。むろん單獨國家としては資源の最も貧弱なる吾國も、日・滿・支の北方資源に新たに今日の南方資源を加ふることによつて、著しく國防資源の強化されたことは、すでに周知の事實である。大東亞戰爭の勃發以來、わが國民の關心は専ら南方に集中されつゝあるが、併し言ふまでもなく南方資源は極めて重要かつ豊富ではあつても、之のみをもつては國防資源はむろん不十分であるから、之に加ふるに北方資源をもつてせねばならぬ。また北方に豊富な石炭・鐵を開發するに當つては、これに必要な資財は比較的開發の容易な南方資源をもつてせねばならぬ。南方に豊富な石油資源についてさへ、將來に必要な石油の量と質においては、北方石炭による液化を必要とするであらう。一言にせば、北方資源と南方資源は、相互に相補充する關係において、國防資源を確保しつゝある。

併しながらこの大東亞戰爭を長期戰として戦ひ抜くために、さらに戦後において大東亞全體の國防國家を完成するために、この範圍の國防資源をもつて果して十分であらうかどうか、こゝに新たな問題として提起されねば

ならぬものがある。

言ふまでもなく國防資源は、軍需資源を中心とするものではあるが、併し同時に國民生活を確保するための生活資源も亦、國防資源の一つとして之に包含されねばならぬ。この二つを包含する國防資源としては、われ／＼の結論においては、今日の謂はゆる大東亞共榮圈の範圍をもつては尙ほ不十分である。これに加ふるに濠洲ならびに印度の資源をもつてするのでなければ、十分なる國防國家を完成することは困難であると考へる。

まづ第一に、國防資源のうち最も重要な軍需資源について見るも、前述の北方資源と南方資源をもつては、尙ほ十分に確保されざるものがある。そのうちの重要な一つは、濠洲において豊富に確保されるものであり、二三の資源については、印度において最も豊富かつ有利に確保されるものがある。それ故に純然たる軍需資源より見ても、濠洲ならびに印度のもつ重要性は、決して看過さるべきではない。

併しながらそれよりも寧ろ第二に、國防資源のうちの生活資源において、この二國のもつ重要性は更に大なるものがある。第一に食料資源において、濠洲はこれまで英本國に對してのみならず、われ／＼の東亞ことにその北方大陸に對して、重要な食糧補給源をなしてゐる。今日この方面に食料の豊富ならざる一つの理由は、この濠洲資源の遮斷にあるが、將來たとへば北支棉花の増産を圖らんとせば、まず／＼濠洲小麥に依存せねばならぬであらう。また吾國を初めとして今日の大東亞の範圍においては、蒙古を除いては牧畜國を包含せず、従つて酪農食料品の不足を免れない現状にあるが、この點においても濠洲酪農品の食料資源は極めて重要である。

併しそれよりも尙ほ重要な問題は、第二の生活資源としての衣料資源にある。今日の範圍における大東亞の資源的缺陷は、衣料すなはち纖維原料品の不足にあり、北支棉花および南方棉花の増産に邁進しつゝあるわけであ

るが、かりに五ヶ年計畫または十ヶ年計畫をもつてその増産を計つたとしても、恐らく大東亞全體の需要を十分に充足することは困難であらう。

然るに濠洲の羊毛資源と印度の棉花資源は、すでに世界周知のものである。この二つの纖維資源をわれわれの東亞廣域經濟に加ふるでなければ、將來の衣料不足を解決することは出来ない。今日の直面せる事態は別として將來の問題としては、南方物資の獲得に對する引當て物資としては、吾國の綿布その他の纖維品をもつてせねばならず、從つて纖維工業も國內に残存せねばならず、從つてまた之に對する原棉問題を考へねばならぬ。然るに印度棉花の將來については、印度國內の綿業發達のために、多くを期待することは出来ない。例へば昨年度の貿易においては、印度はすでに綿絲布の輸出超過國に轉化したと傳へられてゐる。然らば吾國將來の原棉は、印度よりも寧ろ濠洲に期待せねばならぬでないか、これまで濠洲棉花の生産は殆んど問題にされてゐないが、一部の調査によれば、極めて有望なる棉作地が廣大に存在すると言はれる。これに爪哇・印度または支那の勞働者を移住せしむれば、南方諸地域の何れよりも有望なる棉花資源を求めることが出来るであらう。かくして濠洲の纖維資源は大東亞共榮圈の缺陷を補充する上に、不可缺の重要性をもつこととなる。

かくの如き經濟的根據から、大東亞戰爭の進展する過程において、軍事的に外交的に、濠洲ならびに印度の問題は必然に問題とならざるを得ない。かくの如き軍需資源と生活資源が英米側にあることは、即ちそれだけ彼等の戰時經濟力を維持しうる所以であり、反對に是等の資源が我方の陣營に加はることは、それだけ彼等の戦力を殺ぐと同時に、我方の戦力を加へるといふ二重の意味がある。それ故に少くとも經濟的見地においては、そこにはすでに決定されたる必然の將來があると言はねばならぬ。(一七・二・二〇)